平成２４年度第２回仙台市男女共同参画推進審議会　議事録

日　　時　平成24年7月27日（金）15：00～17：00
会　　場　仙台市役所本庁舎２階　第４委員会室
出席委員　下夷美幸会長，佐藤慎也副会長，長田伸一委員，草貴子委員，佐藤美砂委員
佐藤理絵委員，高野雅之委員，高橋嘉代委員，橋本啓一委員，原田俊男委員
〔10名〕
欠席委員　池田和子委員，加茂光孝委員，河崎祐子委員，望月美知子委員〔４名〕
事 務 局　白川市民協働推進部長，小野男女共同参画課長，高橋男女共同参画課主幹，
男女共同参画課担当者

議　　事　１．開会
２．協議
（１）会議の公開等について
（２）議事録署名人の指定について
（３）前回の審議会でいただいたご意見について
（４）情報提供
①岩切・女性たちの防災宣言を作る会　　緑上　浩子
角田　美佐子
②特定非営利活動法人イコールネット仙台
代表理事　宗片　恵美子
③その他の事例
３．その他
４．閉会

1　開会

○高橋男女共同参画課主幹

時間となりましたので，ただいまより平成24年度第２回仙台市男女共同参画推進審議会を開会いたします。本日の審議会は10名の委員の方々にご出席いただく予定となっております。池田委員，加茂委員，河崎委員，望月委員につきましては，ご都合により欠席でございます。佐藤慎也委員，佐藤美砂委員，高野委員につきましては遅れて到着の予定でございます。

（続いて事務局側の出席者を紹介）

○高橋男女共同参画課主幹

それでは，資料の確認をさせていただきたいと思います。委員の皆様に配布してありますのは次第，それから名簿，裏面には席次表がございますけれども，席次票は今

修正させていただきます。左側の列，加茂光孝委員につきましては今日ご欠席でございます。本日，橋本啓一委員にご出席いただいておりますので，左側の４番目のところにお名前をお書き入れいただければと思います。

引き続き，資料の説明を続けさせていただきます。資料１が「前回の審議会でいただいたご意見」，資料２が「情報提供いただく方々について」，資料３－１が「岩切・女性たちの防災宣言を作る会」，資料３－２が「岩切・女性たちの防災宣言」，資料４－１が「防災・災害復興に関する団体の取り組み」，資料４－２が「女性の視点から見る防災・災害復興対策に関する提言（2008）」になります。それから，参考資料１が「青森県男女共同参画地域防災体制づくり事業」，参考資料２が「仙台版体験型避難ゲームづくり」となってございます。追加で配らせていただいた加藤登紀子さんのチラシにつきましては，これは岩切・女性たちの防災宣言の時にご説明があるかと思います。

また，本日は議事録作成のために録音をしてございますので，ご発言の際はマイクをご使用のうえ，お願いしたいと思います。それでは早速協議に移らせていただきます。これ以降の進行は下夷会長，よろしくお願いいたします。

２　協議

（１）会議の公開等について

○下夷会長

それでは本日の協議に入りたいと思います。はじめに（１）会議の公開等についてです。会議の公開・非公開は毎回，審議会の都度，ここの審議会の場で決定することになっています。事務局にお尋ねいたします。本日，特に非公開とすべき案件はご用意ありますでしょうか。

○小野男女共同参画課長

非公開とすべき案件はご用意しておりません。

○下夷会長

それでは本日の会議は公開ということにしまして，本日の議事録につきましても，後日公開することで進めたいと思いますけれども，皆様よろしいでしょうか。

（全委員了承）

（２）議事録署名人の指定について

○下夷会長

では，（２）議事録署名人の指定についてということで，ご出席いただいている委員さんのお名前の五十音順で順番にお願いしております。今回は，佐藤理絵委員と原田委員にお願いしてよろしいでしょうか。

（佐藤（理）委員・原田委員了承）

○下夷会長

ありがとうございます。それでは今回の議事録署名人は，佐藤理絵委員と原田委員にお願いしたいと思います。

（３）前回の審議会でいただいたご意見について

○下夷会長

それでは，（３）前回の審議会でいただいたご意見についてということで，事務局に説明をお願いいたします。

○小野男女共同参画課長

それでは資料１に基づきまして，前回の審議会でいただいたご意見についてご説明いたします。まず地域防災リーダー養成に関する考え方についてのご意見でございます。「地域防災リーダーでは，男女がともに参加することがスタンダードになる形を目指す必要がある」，「防災は男性中心になりがちなので，活躍できる女性を育てることにてこ入れする必要がある」，「地域防災リーダーは女性や若い人たちにもなってもらえる形，地域の核になってもらえる形をつくっていくことが必要」，「リーダーになるのは，地域の中で発言力が強い人になりがち。普通の人にも参加してもらえるような仕組みが必要」などのご意見がございました。

次に女性により多く参加してもらうための，参加者推薦の工夫についてのご意見でございます。「防災リーダー研修の参加者を町内会から推薦してもらう場合，女性を多く推薦してもらうための工夫が必要」，「各町内会から女性を何名出してください，などといった割り当てをすることも必要」といったご意見がございました。

次に広報の工夫についてのご意見でございます。「募集用パンフレットに掲載する挿絵を女性にするなどの工夫が必要」，「女性がリーダーとして活躍できるようなロールモデルを紹介するなど広報の工夫が必要」などのご意見がございました。

講習会の開催の仕方についてのご意見でございます。「女性が受講しやすい講習時間の設定などの工夫が必要ではないか」，「日中は地域に残っているお母さん方が活動の中心になるので，そうした方が地域防災リーダーになりやすい条件を整えることが必要」，「市民センターやコミュニティセンターなど，地域の施設を活用するなど，地域の実情を把握することで，女性や若い人たちが参加しやすくなるのではないか」などのご意見がございました。

最後に，カリキュラムの工夫などに関するご意見でございます。「地域資源を掘り起こすなど，地域の特性を踏まえた訓練ができるといいのではないか」，「地域防災は町内会をはじめ，婦人防火クラブ，消防分団，民生委員，学校など，さまざまな団体が関係するので，団体のリーダーを集めて，縦と横のつながりを深めながら検討すべきである」，「子どもを持った人たちが動きにくいといった状況があったが，心理的なケアなどのカリキュラムにすると参加しやすくなるのではないか」，「災害対応を短期的なもので想定すると，男性的な視点になりがちであるが，避難などが長期化してくる

と女性的な視点が必要となってくる」などのご意見がございました。

以上，前回の審議会でのご意見について，かいつまんでご説明いたしました。

○下夷会長

ありがとうございました。事務局からの説明につきまして，何か皆様の方で確認等ありますでしょうか。よろしいでしょうか。

（4）情報提供

○下夷会長

それでは本日の協議事項の中心であります（4）情報提供に進みたいと思います。では，はじめに事務局から説明をお願いいたします。

○小野男女共同参画課長

それでは資料2をご覧ください。本日は地域における防災に関する取り組みや，震災時に避難所などで支援を行っていく中で感じたことなどにつきまして，「岩切・女性たちの防災宣言を作る会」の緑上浩子さんと角田美佐子さん，そして特定非営利活動法人イコールネット仙台の代表理事である宗片恵美子さんから情報提供をしていただきます。

「岩切・女性たちの防災宣言を作る会」は，平成22年6月に行われた総合防災訓練において，女性たちの防災宣言を発表しました。これは，岩切地区で子育てサークルや町内会活動などの地域活動を行っている女性の方達が集まり，ワークショップ形式で話し合いを重ねてまとめたものでございます。この女性達の防災宣言をつくり上げるまでの取り組み，震災発生時における地域での取り組みなどにつきましてお話しいただくことになっております。

特定非営利活動法人イコールネット仙台は男女共同参画社会の実現に向けまして，幅広く取り組むＮＰＯ法人でございます。平成20年に仙台市の女性を対象に，災害時における女性のニーズ調査を実施し，女性の視点から見る防災災害復興対策に関する提言をまとめています。今回の震災発生に伴いまして，仙台男女共同参画財団と協力して「せんたくネット」を立ち上げ，被災女性のニーズを掘り起こし，支援活動を行っております。また東日本大震災後の女性の置かれた状況についても調査を行われておりまして，地域における男女共同参画の課題を洗い出し，提言を行っています。本日は，災害時における女性のニーズ調査，女性の視点から見る防災災害復興対策に関する提言の中で見えていたこと。地域防災を効果的に推進するために必要な男女共同参画の視点などにつきましてお話しいただきたいと思います。

○下夷会長

それでは，最初に「岩切・女性たちの防災宣言を作る会」の緑上さんと角田さんにお話をお願いしたいと思います。では緑上さん，角田さん，どうかよろしくお願いいたします。

○岩切・女性たちの防災宣言を作る会　緑上浩子氏（以下，緑上氏）

緑上と申します。よろしくお願いいたします。「岩切・女性たちの防災宣言を作る会」という名前がついておりますが，これは私達がつくった名前ではなく，便宜上つけていただいたお名前だと思っております。

私どもの集まりは，岩切という地域において子育てなどを通じながら，ＰＴＡの役員であったり，育児サークルであったり，いろいろなボランティア活動であったりを通して，お友達になったお母さま方の集まりです。その女性たちが集まって，こういう防災宣言をつくることになりました。資料の方ですけれども，資料３－１に私どもの概要が書いてございます。岩切という地域は昔からの農業地帯でございます。古くからの農業地帯とあと岩切駅前を中心とした新しい新興住宅地の入り混じった地域になっております。親子三代・四代と暮らしているご家庭もあれば，核家族でそれこそご親戚もいず，ご夫婦とお子様だけで暮らしていらっしゃるご家庭もございます。なので，地域的な問題は本当に多種多様にございます。おしめのころから知っている子どももいれば，どこの誰だか分からないようなお子さんも一緒に混じり合って生活している環境になっております。

そんな私どものところへ，当時の宮城野区の区長，今は男女共同参画財団の副理事長をなさっていらっしゃる木須八重子さんの方からお話がございまして，「岩切の地域で女性の目線で防災の宣言を出してみませんか」というお話がございました。こちらの方は，私どもの地域でトップリーダーという訳でもないですけれども，女性達の中でとても活躍している方がいらっしゃるんですが，多分社会学級等でもいろいろ長年活動されてきた方なので，そちらの方のご縁があってだと思うんですけれども，その方のところにお話がございまして，彼女の呼びかけによって，私どもが集められた形になっております。

5月13日には，イコールネット仙台の宗片さんをお招きいたしまして，ワークショップを開催させていただきました。子育てサークルに参加していらっしゃるお母さま方を中心に，災害時に何ができるのか，どういうことが不安なのかということを中心に，いろんな意見を出していただきました。その中でやはり赤ちゃんや小さいお子さんを連れているお母さんがいかに不安な状態に置かれているのか，情報が届かない状態なのかということが改めて浮き彫りになりました。

その次，5月17日は同じようなワークショップを，今度はもう少し対象年齢を上げてと言ったら申し訳ないですけども，中年から熟年にかけての女性達を中心に集めていただきまして，同じようなワークショップをいたしました。そこで出てきたのは，今度は介護をしている方々の問題でした。寝たきりのおじいちゃんおばあちゃんをどうやって連れて避難したらいいのかとか，自分自身体が不自由ですぐに逃げられるかとか。また，多くの女性に共通していたのが「夫が昼間はいない」，「平日は男性がまず地元には残っていない」ということで，そのような中で弱者である老人・子どもを

どのように女性達で守り通せるのか，という不安が出されたことが多くありました。そういう意見を基にして，宣言作成という形になりました。これは本当に宗片さんのお力をお借りして，私達が私達の考える視線を基にしてつくった宣言になっております。

この宣言は，平成22年度の仙台市宮城野区総合防災訓練が岩切中学校を会場に行われましたので，当日その場で岩切小学校のＰＴＡの副会長をされていた方と，岩切中学校のＰＴＡの役員をされていた方と女性２人によって，その場で読み上げられました。それによって，その場に一緒に集っていた男性陣の方々へも広くお知らせする運びとなりました。これをきっかけにして，ほかの地域にいらっしゃる防災コーディネーターさんなどからも声をかけられて，「どのようにしてこれを作成されたのですか」と，その経過などをお話ししてくださいなどというお声もいただくようになり，お声がかかったところではこういうお話をすることが何度かございました。

東日本大震災の時ですが，震災の直前，９か月前につくられた宣言でしたので，この宣言が皆様の頭の片隅には残っていました。この中でうたっていた女性達が頑張らなければいけないというものが，皆様の心のどこかにあったようで，それぞれの地域において，自分達のできることを率先してやられた女性の方がたくさんおられました。その細かい活動の感想につきましては，皆様のお手元の資料にいろいろ載せておりますので，ご覧になっていただければと思っております。やはり男性中心の防災訓練の中で，女性がどのように動いたらいいのかということが，なかなか自信が持てないでいた部分があったのですが，この宣言によって女性も積極的に動いていいんだという後押しをされたようだったとおっしゃる方もいて，率先して避難所であったり，地域のコミュニティにおいて，もう少し子どものことを考えましょうとか，女性としてどう動いたらいいのかというお話をなさる方もたくさんおられたようでした。

この中でも書いておりますけれども，私達は本当に何の縛りもなく，何の肩書きもなく，どちらかと言うと仲良しのママ友軍団って言ったら変ですけども，本当にそういう立場で集まっていましたので，言いたいことを言い合って，やりたいことをやっている中で，段々とみんなの求めるものが同じ方向に向かってきたというのが，この防災宣言の結果としての，震災後の活動だったと思います。避難所の炊き出しを手伝ってみたり，遠く亘理町の方まで避難所の炊き出しにお手伝いに伺ったりもしました。そういう中での活動がいろいろなところで皆様に認められることにもなり，皆様のお手元にこの加藤登紀子さんのチラシをお配りしていますけれども，「災害から１年　加藤登紀子さんと共に」ということで，「男女共同参画と災害復興 2012」というシンポジウムに私どもが参加させていただいております。自分達の言葉で呼びかけた女性の防災宣言というタイトルで，東京にお邪魔して発表させていただきました。自分達のために，自分達の子どもを守るために，家族を守るためにと始めたちょっとした活動が，いろいろな場にお呼ばれして発表するっていうことに若干戸惑いを覚えているという

のが現状で，普段は本当に普通の主婦の集まりなんですね。なのでちょっと戸惑いながらも，ぜひ私たちの体験が皆様の何かの役に立つのであればと思って参加させていただいております。

○岩切・女性たちの防災宣言を作る会　角田美佐子氏（以下，角田氏）

角田と申します。この防災宣言ができた９か月後にまさに東日本大震災があったんですけれども，防災宣言をつくったメンバーはそれぞれの活動の場で，震災時，または震災後，いろいろな活動をしておりました。私と活動を一緒にしなかった仲間もいます。後からから話を聞いて，「へえ，そんなことをしていたんだ」と後から知ったこともありました。

今日一緒に来ています緑上さんは，家の近くにコミュニティセンターがあるそうで，そこのコミュニティセンターでの共助の働きかけのリーダーをしていたそうです。つい最近知って驚きました。指定避難所ではない場所なんですけれども，コミュニティセンターということで，人が集まり出しました。もちろんすごく混乱しました。物資もそんなにありません。そんな中，何とかしなければいけない。その時に緑上さんの心の中に，女性のための防災宣言がありました。防災宣言をつくる場は私達にとって学びの場でもありました。災害が起きた時に，どういった動きをしなければならないんだろう，自助という言葉をその時学びました。共助という言葉も知りました。なかなか公助は受けられないんだということもその時に知りました。そんな学びから子ども達を落ち着かせること，子ども達を発電機の周り，明かりの周りに寄せて安心させました。お年寄りの方を１つの場所に，スペースにまとめるようにしました。あと皆さんに呼びかけて，家から提供できる物資を集めたりするなど，コミュニティセンターを仕切っていたのは，実は緑上さんだったということをつい最近知りました。

この宣言の集まりの中には，常に地域の中でリーダーとして長年活動している女性の方がいるんですけれども，「震災が起きた時はいろんなことが提供できるよ」と言ってくださっていた方なんです。あまりの揺れに，彼女の家は見てすぐ全壊だなという状況でした。みんな，どうやって声をかけたらいいんだろうと心配する中，仙台市の大サイズのゴミ袋くらいの大きな袋２つにたくさんの梅干しを持って，にこにことみんなの前に現われて，「これさえあればご飯が食べられるから」と逆に彼女に励まされたりもしました。

宣言の中には，「中学生の息子だって，みんなを守る立場にたつことができる」というくだりがあるんですけれども，実際，地域の中学生，岩切中学校の子どもたちは一生懸命自分たちにできることを探して，学校に行って避難所のお手伝いをしてくれました。それを学校の先生方が取りまとめて，「ちょボラ隊」という活動が始まりました。「ちょボラ隊」の活動として，「希望の一歩」と刻まれたプランター，小さな花を植えたプランターを岩切の各所に，この「ちょボラ隊」が置いてくれました。その「希望の一歩」，地域のあらゆる場所で目にするたびに，私自身，とてもとても勇気づけられ

ました。

そんな中，私自身のことを少しお話ししてもよろしいでしょうか。私自身，実は夫の実家が津波の被害に遭いました。あと親戚で沿岸部に住んでいる者が多かったので，安否確認に追われました。夫の実家は津波が来たんですけれども，家屋は１階部分が浸水しただけだったので，その後片付けに追われる日々もあり，実際，私自身，地域の中での活動にはあまり貢献できなかったんじゃないのかな，と今振り返って思っています。また震災の被害は同じ仙台市内であっても，場所により，また人により，とても差があるんだなということを徐々に知ることになります。私自身が体験したことをしゃべることで，誰か傷つけるんじゃないかなという思いが実はずっとあり，岩切以外の方々と震災の話をすることをずっと控えてきていました。でもあの時，私の取った行動は正しかったのかどうか，実はずっとずっと心に思っていたことがあります。

この審議会の趣旨に合うかどうか分かりませんが，ちょっと今日は勇気を出して，私の震災後の子ども達のために頑張ったことについて，少しお話をしたいと思います。当時，私は岩切小学校のＰＴＡの本部役員をしておりました。担当は健全育成委員会です。子ども達の交通安全とか防犯に関わる部署の委員長をしておりました。その健全育成委員長として，どうしても子ども達の登下校時の安全の確保をしなければならないと考え，行動したことについて，少しお話をしたいと思います。

３月 11 日の大地震で，子ども達は学校を休校することになって，学校がない日々を過ごしておりました。そんな中で学校が子ども達にとって，いかに大事な場であったのか，友達と仲間と過ごす中心が学校だったのかというのをすごく思い知らされました。また当時はとても余震の回数も多く，揺れも大きく，またものすごく大きな余震を心配しなければいけない時期でもありました。震災から１週間くらいは電気も水道もありませんでした。ガスの復旧はそれから半月，長いところでは１か月近く待った地区です。子どもたちもきっと恐かったし，不安だったと思います。寒かったし，岩切はなぜか物資が届かず，ひもじい思いをしました。でもそんな中，子どもたちは頑張って耐え抜いたと思います。実は家庭の中で，笑いをもたらしてくれたのも子ども達だったというご家庭も，とても多くありました。

３月に１日だけ登校日があり，そのときに終業式や卒業式を一斉に終わらせたんですけれども，４月になり，学校が始まるという情報がようやく入ってきました。４月 11 日から当初の予定よりも１日か２日遅いだけで学校が始まる，そんな当たり前のことに大きな喜びを感じました。岩切小学校は当時，建て替えからおよそ７年目という新しい校舎で，地震による被害が無かった訳ではないんですけれども，安全性が確認されており，授業に問題がないような状況，建物はそんな状況でした。けれども，自宅から子どもを学校まで歩いて通わせる母親の立場からすると，岩切地区の建物被害や道路の被害はとても大きくて，どうやって子どもたちを登下校させたらいいのだろうかという不安が私自身もありましたし，多くの保護者の方々も同じ気持ちで抱えて

いたと思います。

学校が始まるという知らせはあったものの，学校からは特に登下校の安全確保についての話は無かったんですね。ＰＴＡの方にようやくつながり始めた携帯電話やメールを使って，問い合わせが結構ありました。どうやって通わせたらいいんだろうか，あと，いつもやっている子どもたちのための交通安全指導，お当番表もつくれるような状況じゃないし，岩切にいない人もいるし，どうやって活動したらいいんだろうか，そんな声が集まって来ました。学校はとても忙しかったと思います。学校の対応に対して不満があるわけでも何でもないんですけれども。ただ，利府街道には，実は老朽化のために架け替えの予定が決まっているような，とても古い歩道橋があるんです。何年か前にも自然に何かボルトが落下してしまってという事故があった歩道橋，でも地理的な問題から，１千人規模の学校なんですが，500名くらいの児童はその歩道橋を渡らないと学校に来られないという状況がありまして，保護者の関心はその歩道橋に集中していました。学校の先生に歩道橋の安全性について問うたところ，「分からない」と。「ただ，通行止めになっていないのであれば通れるんじゃないか」というお返事だったんです。その時に，私はやっぱりできる人がリーダーとなって，子ども達の安全を確保していかなければないんじゃないかなという決意をしました。

ＰＴＡの活動でも，登下校は学校の管理下ではあるんですけれども，ＰＴＡでも交通安全指導などを常時しておりましたので，その経験を生かして，みんなで何かできないかなと考えました。当時副会長の女性の方がいるんですけれども，彼女は防災宣言をつくったメンバーの１人で，子ども達の登下校は保護者で見守る必要があるんじゃないかということで，２人で相談をしました。その中で，話を学校の健全育成担当の先生に持ちかけたところ，教頭先生との間に立っていただいて，学校とのやり取りができるようになりました。またＰＴＡ本部の他のメンバーも協力をしてくれました。それからさまざまなＰＴＡの活動や，地域での活動を通して知り合ったお母さん達のつながりがこの時に，とてもとても大きく力強いものでありました。子どもの登下校の安全確保のための活動の呼びかけとしまして，まず16地区ある地区の健全育成委員さんにお便りを持って，地区の皆さんにご協力を呼びかけようというのが第一弾でした。この時は自転車で３時間ちょっと，当時中学校に上がろうとしている６年生の息子と，小学校４年生になろうとしている娘と，自転車で16地区の頼れるお母さんの家を回りました。あと，特に仲のいいお母さんのいる地区で，子ども達のために地区の子ども会のお母さんで集まるという情報をキャッチしたら，そこに行って子ども達の登下校について，みんなで協力して，子ども達を守っていこうというお話もさせていただきました。

そして迎えた始業式の日には，各家庭にＰＴＡから，「子ども達の登下校時の安全確保についてご協力のお願い」，というお便りを出しました。「できる限りの見守り活動，家の近所までででいいんです。次の地区のお母さん達がバトンを受けて，次の地区にま

た行きます。それをつないでいけば，子ども達は学校に行けると思います。あと，どうしても心配な方，お時間のある方はぜひ子どもと一緒に学校まで歩いてみてください。」というお便りを出しました。

お母さん方の中には，やはりどうしても仕事に行かなければいけないという方もいらっしゃいます。特に医療従事者の方ですとか，介護施設の方，あとやっぱり物流関係もものすごく生活の中では大事な部分を占めていたんだなということで，そういう子どもに付き添えないお母さん方にとっても，地域にいるお母さんたちが子ども達のことを頑張って学校まで何とか送ります，という活動があることを知ることができたことはとてもよかったんじゃないかなと，後々になって思いました。

あと，その活動を支えるためにも，特に親しい方にはメールをして，この活動を支えていただけるようにお願いをしました。いよいよ学校が始まるという，そんな直前にして，４月７日の深夜，実は震度６強の余震がありました。あの時に岩切地区はとてもとても大きな被害を受けておりまして，３月 11 日は道路ですとか，そういったインフラがちょっと駄目になったんですけども，４月７日の夜，各家庭が大変なことになりました。家の中は３月 11 日よりもひどかったというお家も多かったですし，何とか持ちこたえていた家屋が半壊になり，全壊になり，というお家が多かったです。

そんなことを思うと，やはり勇気を出して行動を起こしていてよかったなと思いました。そんなこんなありましたが，予定どおり新学期が始まりました。皆さんのご協力もあり，子ども達の登下校には多くの保護者の方の見守りや付き添う姿がありました。地域の方もご協力をくださって，出て来てくださる姿も見受けられました。また，学校は決められた通学路であっても，危険であると判断した道については柔軟に対応してくれて，迂回の道を通学路として緊急に対応もしてくれました。その通い慣れていない道には，その地区のお母さん方，本当に交替で毎朝指導に当たってくれたりもしました。子ども達の学校生活のため，お母さん達の気持ちは１つになったんじゃないかなと思います。４月の活動は５月以降も継続する必要があると考えました。復旧は進んでいるんですが，どうしても「仮」がつくような復旧状態でしたし，繰り返しになりますが当時はまだ余震も多く，学校に行く途中，ここで揺れたらどこに避難しようか，そんな不安もまだ多い中，５月以降も継続しました。復旧が少しずつ進むにつれ，また崩れた塀とかが片付いたり，家屋の修理や解体が少しずつ，少しずつ進み，通学路の安全確保もそれにつれて進んだと思います。

それから子どもの心のケアについても，心を砕いてきた震災後の日々だったと思います。震災の規模があまりにも大きすぎて，どこまでが震災の痕なのかというのが分からないような状況でした。学校はもう避難所ではなかったけれども，心の中ではまだ震災の後という日々をずっと過ごしていました。子ども達の見守り活動の締めくくりではないんですけれども，平成23年度，最後の全体での子ども達を見守る活動として，私達岩切小学校ＰＴＡは３月に「防犯子どもを守ろうデー」を考えました。なぜ

なら３月 11 日，岩切小学校は「防犯子どもを守ろうデー」で，子ども達は下校の途中だったんです。きっと「３月の守ろうデー」と聞いただけで，足がすくむ子どもがいるんじゃないかなと心配にもなりました。そんなことを秋のうちに学校にお話をして，何も行事がなくて，差し支えがなければ，お母さん達でいつもよりも盛大にというか，しっかりした形で，子どもたちの不安を取り除く活動をしたいということを伝えました。しばらくして学校から帰って来たお返事は，３月の守ろうデーに引き渡し訓練をしますという，これは災害時の訓練なんですけれども，子どもに何かあった時に親が子どもを学校に迎えに来て，一緒に帰るという訓練なんですね。その引き渡し訓練をするというお返事をいただいて，とてもとても親としてありがたく，また子どものことについて，学校はすごく考えてくれているんだなと，嬉しく思いました。その３月の活動についても，ＰＴＡから特別な守ろうデーであるということで，お便りを発行いたしました。

迷いや不安の中ではありましたが，そのような行動ができたのは，女性による防災宣言があったからだと私は思っております。あの宣言をつくる話し合いは学びの場でもあり，みんなのニーズを知り，みんなの気持ちが分かりました。だから動こう，共助の活動の基盤となったと思います。女性の視点かどうかはわかりませんが，私は子どもたちをどうしても守りたかったです。子どもの不安を取り除くことはできないのかもしれないけれども，寄り添い，いつも一緒にいるから大丈夫とか，お母さん達はみんなのことを思っているよと，子どもの心に働きかける活動をどうしてもしたかった。子ども達にただ，楽しい学校生活を過ごして欲しかった気持ちです。

私の活動は，小学校のＰＴＡから保護者へという，横のつながりのものだったんですけれども，地域の中では私達はまだまだ年功序列の下っ端です。年配の方々の知恵と経験はとても財産だと思う部分もありますが，体力的に動ける私達と，そういった方たちと調和のある活動ができたらいいんじゃないかなと，振り返ってみて思っております。当たり前のことですが，普段からの地域との交流の大切さをすごく思いました。今，ご自分の住まいへの関心がすごい高まっている時期だとは思うんですけれども，自分の住まいから一歩出て，ぜひ地域の皆さんに，地域までその関心を広げていっていただけたらいいんじゃないかなと思います。

あと，子どもがいるということで，活動の範囲を広げることができなかった，特に避難所などに関しては，あまりお手伝いができませんでした。ただ，当初できなかったことが地震発生後，数日経って段々できることも増えてきたんじゃないかなという思いもあります。それで，思ったことは，この震災に限らず，大人は子どもを守り育てるための存在だけではなく，大人も子どもを必要としている，双方がお互いを必要としているとすごく思いました。弱い者を放っておけない，何か慈愛のような気持ちが女性ならではの視点なのかなとも思います。

特別な活動が防災のために必要なのではなく，当たり前のコミュニティとしての活

動が災害時にも力になるんじゃないかなと，今，震災を経て思っております。そのことに気がつき，あの震災の時に大胆な行動を取ることができたのも，岩切・女性たちの防災宣言だと思います。深く関わってくださった木須様，宗片様，そして岩切の仲間に感謝の気持ちを申し上げたいと思います。長くなりましたが，私からのお話は以上です。

○下夷会長

緑上さん，角田さん，どうもありがとうございました。

それでは委員の皆さん，お２人に何かご質問などありましたらどうぞ。地域防災についてのご意見はまたあとで，前回と同じように後でディスカッションしますので，ご質問を，どなたからでも結構です。

○佐藤（慎）副会長

大変貴重なお話，ありがとうございました。先ほどの歩道橋に関しては，通学路から外したりなど，どうされたのかということを教えていただいていいですか。

○角田氏

震災後，そのまま歩道橋は利用しておりました。ただ，震災から大分経って，昨年の秋頃に実はボルトが１つ外れていたということが分かり，仮の補修をいたしました。なぜ仮だったかと言うと，今新しい歩道橋の設置に向けて工事が始まっているからです。予定では，平成 24 年度か 25 年度中には新しい歩道橋ができる予定となっております。

○橋本委員

橋本と申します。緑上さん，角田さん，どうもありがとうございました。この宣言は，女性達が頑張らなければならないと，そんな気持ちから子ども達とかお年寄りを守って上げたいんだ，そういう思いでつくられた宣言だということがよく分かりました。その宣言が後押しになったり，率先した行動になったり，共助の基盤になったりというお話がありました。この宣言をつくったことによって，他の女性の方々の反応であったり，男性の方々の反応というのはどのようなものだったのかをお聞きしたいと思います。

○緑上氏

そうですね，この宣言を聞いてくださった女性の方には共感をたくさん得ています。ただ，お耳に入らなかった女性の方もたくさんいました。広報誌に挟んで地区にも配布しましたし，防災訓練の会場でも読み上げはしたんですが，実際この宣言を必要としている小さいお子様を連れているお母様などは，防災訓練等にはほぼ出て来れない世代ですよね。あんまり小さいお子様連れは危険とか，手間がかかるということでご遠慮される方が多いので，なかなかお耳に入らなかった方もあったようです。やはり，震災以後は少し興味を持たれている方が増えてきまして，少人数ではありますが，児童館ですとか，いろいろな子育てサークルなどにちょっとお呼ばれしてお話をする機

会があります。

若いお母様方も横のつながりを求めていらっしゃるようで，震災時，誰からも自分が知られることなくアパートの片隅でひっそりといたことを大変悔いている方がやはりいて，誰かに助けて欲しかった，誰かに声をかけて欲しかったとおっしゃるお母様方がたくさん出られまして，そういう方々とちょっと上の先輩の年代の，私どもの年代の女性達との交流というのは若干増えているとは思います。

○角田氏

地域がら，やはりまだまだ現役の世代というか，70代でもすごく元気な方も多く，あと，これをいざつくって９か月後に震災だったものですから，なかなか浸透するところまではいっていなかったのが現実だと思います。男性の方に私達が特に広報することもなかったので，今後の課題の１つじゃないかなと捉えております。

○緑上氏

結構，私どももいい齢なんですけども，まだお姉ちゃん，娘扱いになっているので，地域の中ではなかなか厳しいですね。

○橋本委員

私もお２人に親近感を持つのは，お隣の松森という，地域性がすごく似ている旧来からの地域出身なもので，我々の父親とかおじいさんたちがまだまだ力を持って，地域を仕切っているような地域性なものですから，なかなかお２人のような若い方々がそういった形で表に出て来るっていうのは難しいんじゃないかな，という感じは確かにしておりました。だから，ちょっと男性の方々の反応はどうだったのかなというのをお聞きしたかったということであります。

この宣言によって，先ほどおっしゃったように，自分達が自ら動こうとか，学びの場を自分たちの横のつながりとしてつくっていこうというのは，確かにそういう効果があったんだろうなあと。男性もそういうものをつくることによって，最近よく名前を聞きますけど「おやじの会」とかね，ああいったものもすごく似たような形で，横のつながりをもっともっとつくっていこうという気持ちでつくっているというのは，間違いないことだと思うんですね。

私も，実はＰＴＡをさせていただいております。この間の委員会の時にも１つ発言させていただいたのは，地域の方々というのはやはり年配の方々，さっきおっしゃったちょっとベテランの方々が中心であっても，やはり地域に実際にいるのは，お２人のような若い女性の方々です。そういった方々が町内会だけではなくて，それに関わってはいないけれども，もっともっと地域の中心となるような形で出て来られるような形というのは，さっきおっしゃったように日頃からの協調性の大切さとか，調和の大切さということはおっしゃいました。こうであったら，もっともっと私たちも地域とかの活動，町内会の活動とかに出やすいのになあというものが，もしありましたら，お聞かせいただきたいと思います。

○緑上氏

難しいですね。実際，町内会の役員会など上の方の組織というのは，ほぼ男性，それもご高齢の男性の方々が占めている席がほとんどなんですね。そういう席に私どもがＰＴＡの肩書きと役員の肩書きでご一緒する機会があっても，お茶くみ担当みたいな形になるのが実際の現状ではあります。ただ，そういう地道な活動でいろんな会合に顔を出していって，顔をつないでいくことで，いろんな部分で信頼していただくことはできていると思うんですね。

なかなか年配の方のお考えを急にがらっと変えて，女性の視点をもっともっとなんて言われても，結構厳しい状況ではあるんですが，その下の若い世代になると，もうそれほどの男性優位の考えというものはなく，男女共同ということがもう自然にはなってきているので，これから10年後とかの話であれば大丈夫なんだろうなと思います。ただ，そういう場に女性が入る機会と，入りやすい環境ですかね，やはり会議が朝から晩までずっと続くとか休みの日に設定されると，子どもが家にいて出づらいとか，そういう場合がやっぱりあります。特に，小学生のお子さんとかをお持ちですと，子ども１人家に置いて夜は出られませんという場合もありますし，そういう女性が参加しやすいような会議だったり，講座であったりの形というものを少し考慮していただければ，私どももももっと積極的に参加していけるのかなとは思っております。

○角田氏

やはり同じ女性，特に１つ上の世代の女性の方々，きっとうちの母親の世代もいろんなことを我慢してきた世代なんですね。その方々から見ると，私達のやっていることは出過ぎたことであるとか，何か「昔はこうだった，自分たちの時はこういうことをしていたんだから，そういうふうにしなさい」という声を，まだまだ町内会においてはいただいているのが現状です。男性だけではなく，そういった方々のご理解があると，とても私達も羽ばたきやすいというか，動きやすいと思っております。

○橋本委員

貴重で率直なご意見，ありがとうございました。

○下夷会長

どうもありがとうございました。

ワークショップを２回やったということなんですけれども，宣言をつくるまでには，このワークショップだけでつくったんでしょうか。

○緑上氏

基本的にワークショップを土台にして，この宣言作成というところで皆さんでもう一度，核となるメンバーで集まりまして，その場で文言を練りながら，当時区長だった木須さんのご指導なども受けながら，言葉をちょっと組み替えてみたり，いろいろ差し替えてみたり，いろんな立場からできるだけ皆さんに偏見のない形でつくれたらということで練ることはいたしました。

○下夷会長

今日はお２人来ていただいているんですが，この宣言づくりに関わった女性達というのは，何人くらいでつくったという感じなんですか。

○緑上氏

実際，ワークショップの参加人数等を入れると，40 名前後の者が関わっておりまして，核となるのは多分 10 名前後だと思います。

○下夷会長

それは，ＰＴＡの方を巻き込んでですか。

○緑上氏

ＰＴＡだけではないのですが，でも実際は小中学校のＰＴＡの方とそのＯＢの方みたいな感じの方が中心にはなっていたと思います。

○下夷会長

ありがとうございます。その宣言をつくられて，防災訓練で発表された。その場があったということはすごく大きかったと思うのですが，それ以後も震災までの間に活動を継続されたということも，とても重要なことだったと思うのですが，これはどういう形で，ご自分たちで何か働きかけているんですか。

○緑上氏

先導してくださる先輩女性の方々がいまして，そちらの方々からこういう場所で発表してみないかというご提言をいただきまして，という形がほとんどです。私どもからという形ではなかったです。

○下夷会長

ということは，まずここで，岩切で自分達のグループができて，それがまた別の女性たちのところとつながっていったことで活動が発展していったと考えていいですよね。

○緑上氏

その発展部分は，私どもにはちょっと見えていないです。確かにお呼ばれしては行きますが，岩切というのは小学校１つと中学校１つで，１つの学区になっていますので，すごく地域性が密着しているというのも変ですけれども，小学校のお母さんがそのまま中学校に上がってきます。本当に幼稚園からずっと同じ顔ぶれで活動することも多く，皆さんの距離感の近さということもあって，こういう活動が大変展開しやすかったエリアではあるのかな，とは思っております。

○下夷会長

ありがとうございます。他には，よろしいでしょうか。

○佐藤（理）委員

どうもありがとうございました。宣言づくりにかかわられた 40 名の方が，今も一緒に活動していらっしゃるのでしょうか。それから，地域でこの防災宣言を普及させる

ために，これから何か活動していこうというご予定はあるんでしょうか。

○緑上氏

もともとこういう会ではないというのを言っておりましたので，皆さんそれぞれ自分がその会に属しているという認識はないので，この会で動いているということはありません。それぞれ地域ごとに小学校のＰＴＡであったり，中学校のＰＴＡであったり，また今度，学校支援地域本部というのも岩切には設立されていまして，そちらの方に皆さん参加されていたり，また子育て支援のほうの活動をされていたりと，それぞれのその場その場のいろんな輪がありまして，それぞれで皆さんが重なりながら動いているという状況なので，特にこの会自体で何かをというのは多分，皆さんの頭にはあまりないかと思います。

○佐藤（慎）副会長

要するにプロジェクトチームみたいに集まって，今はまた皆さんそれぞれ活動している形ですか。

○緑上氏

その時声をかけて集まれる人で集まって何かをするというのが岩切のいつもの動き方なので，誰かが何かを思いつくと知り合い同士メールがバーッと回ってきて，日程の合う人が集まって，そこで何かを考えて，「じゃあ次何日ね」と言うと，またそれで一斉にメールが回って，また集まれる人がということで，その都度ワークショップで集まる人も違って核となる人も出たり入ったりしているます。私自身，４回のワークショップうち２回くらいしか出ていませんし，全部を通して出た方はほんの１人２人かなという感じですが，それぞれ皆さん出られるところで都合をつけて，申し送りをしながらという形で１つにまとまっていくっていう形なんです。無理をしないでやるというのが基本です。

○下夷会長

それでは，緑上さん，角田さん，本当にどうもありがとうございました。この活動が女性のエンパワーメントとして，本当に素晴らしい実践の事例だということがよく分かりました。これからもどうぞ地域のために頑張ってください。

（緑川氏・角田氏退出）

○下夷会長

それでは，次の情報提供のテーマに移ります。次は，特定非営利活動法人イコールネット仙台の宗片さんにお話をお願いいたします。それでは宗片さん，どうぞよろしくお願いいたします。

○特定非営利活動法人イコールネット仙台　代表理事　宗片恵美子氏（以下，宗片氏）

宗片でございます。よろしくお願いいたします。今，岩切の女性たちと久しぶりに会いました。最初，お話がありましたように，ワークショップに少し関わらせていただいて，その後こんなにもパワフルに活動を展開してくれたんだということに，ちょ

っと感激をしておりまして，これからも応援をしたいと思っております。

私どもの団体は，ご紹介をいただきましたように，男女共同参画を実現するためにということ，生活全てがテーマとなりますので，大変幅広い取り組みをしております。ただ，この防災災害復興というのは大変重要なテーマと捉えておりましたので，この震災前から取り組みをスタートはさせておりました。

2008年に，仙台市内に住む女性達1,100人を対象にいたしまして，災害時における女性のニーズ調査を実施しております。この調査の背景には，宮城県沖地震が近い将来発生すると言われておりましたし，それから95年に阪神淡路大震災が発生しておりますが，その時に女性達が抱えた数々の困難というものも明らかになっておりました。ですから当然，宮城県でまたこの震災が起きた時にも，同じような状況が想定されるのではないかということで行った調査でもあります。

この調査の結果からは，災害を想定した時に女性達自身が抱える不安や心配というものだけではなく，女性たちがケアをしている対象，子ども達であるとかお年寄りであるとか，障害を持った方であるとか，そういう方達が抱える不安や心配についても明らかになったということがあります。こういった不安や心配というのは，なかなか防災災害復興というのは男性の領域と考えられがちのところがありまして，どうしても女性達のきめ細かな不安や心配に対して，どのような対策を講じたらいいのかということは，それまで考えられてこなかったということがあると思うんですね。そういう意味では，私達もそういった不安や心配に対して，きめ細かな防災対策が必要であるということで，お手元にお渡ししております「女性の視点から見る防災・災害復興対策に関する提言（2008）」というものをまとめまして，そしてこの調査報告については，各市町村であるとか，各地域団体でも報告会をさせていただいておりました。ですからこの防災・災害復興について，いわゆる男女共同参画の視点が必要であるということは，なかなか最初受け入れる体制がない場合が多かったんですけれども，やはりデータの下に説明をいたしまして，ご理解をいただいたという経緯がございます。

今回の3月11日に震災が発生しまして，私達がまず気がかりでしたのが，避難所にいる女性達の状況でした。これは提言の方をご覧いただくと分かるのですが，その中で女性の視点に配慮した避難所運営というものを盛り込んでおります。これも2008年の調査の時に，女性達から避難所に対する数々の要望が出されておりました。それを盛り込んだ形でこの提言をまとめておりましたので，まず避難所での女性達の状況を，私たちはぜひ確認をしたいということで，お見舞い訪問であるとか，それからまた先ほどもご紹介をいただきました財団と協力をして「せんたくネット」，いわゆる洗濯代行ボランティアになりますが，この活動を始めたわけです。

そういう中で，避難所の課題というのは数々出ております。これも私どもが予想したとおりというのは大変残念なんですけれども，そういった避難所の状況というのを課題として，少しご紹介をしたいと思います。私達がお見舞い訪問をした先というの

は仙台市内だけではありませんで，宮城県内の登米市・栗原市・東松島市・気仙沼市，そういったところにも女性に向けた物資をお持ちしながら，お見舞い訪問という形で参りまして，女性達の声を拾うというような活動をしてきた訳です。その中で見えてきたものというのが，やはり運営については，ほとんどがリーダーが男性です。そのためにどうしても女性の声や要望というのがリーダーに届いていかないという，それがどこの避難所にも見られることでした。例えば設備の面につきましても，仕切りを使わない，あるいは更衣室や授乳室もありません。プライベートな空間が確保されておりませんので，多くの女性たちは布団の中で着替えをする，またトイレの中で着替えをする。授乳もできませんので，母乳を止めてしまって，物資の中のミルクに切り替えると。ところが哺乳瓶は無い，ミルクを溶かすお湯は無いというような中で，大変困っているという声が聞かれておりました。中には，夜中に寝返りを打つと，隣に全く知らない男性が寝ていたということで，震え上がったというような，そういった女性の声も聞かれました。

これについては，私達も大変胸を痛めた訳なんですけれども，仕切りが使われないまま避難所の入り口に山積みになっている，という避難所も中にはありました。いわゆる管理をする側にとって，仕切りというのは管理しにくいというような声もありました。仕切りの中で何か不審者が入って，何か起きると困るとか，体調を崩した被災者がいると困るとか，そういうようなことで，リーダーの方からの説明というのはありましたけれども。ただ，女性達に聞きますと，皆さんやはり仕切りは欲しいと。少なくとも手足を伸ばしてゆっくり眠れる空間が欲しいということなんですね。つまり，避難所の生活というのは数日間ではなく，今回は数か月にわたっております。そういう中で，やはり女性たちが数々のストレスを抱えていた，ということは確かだったのではないかと思います。

また物資についても，やはり女性ならではの物資というのは必要な訳です。下着ですとか化粧品ですとか，あるいは生理用ナプキンですとか，確かに支給はされておりましたけれども，例えば生理用のナプキンなどはお年寄りにも重宝がられたんですね。いわゆる尿もれパッドの代わりにナプキンが使えるので，やっぱりナプキンが欲しいけれども，それをリーダーに伝えられないというような，そういった思いを私達に語ってくれる方たちもいらっしゃいました。

また，避難所によっては調理室が設置をされている場所がございます。その調理室で，避難所で被災をした何百人という被災者ですね，その方達の食事３食を被災した女性達がつくります。ですから，早朝から調理室に入りますと，そこから解放されるのは夜の 10 時ぐらいですね。その間，当番制であっても，その調理室の中に拘束をされる訳です。それも大変負担であるというような女性達からの声も聞かれました。男性はガレキの処理で報酬をもらえるにも関わらず，自分達はこうして１日調理に担当するのは無報酬であると。そういったことに対する不公平感というものも，やはり訴

えてくる女性達というのもおりました。ただ一方で，わずかですけれどもリーダーが女性であるという避難所もございまして，そこではやはり仕切りも使われていましたし，更衣室もありましたし，トイレにも十分な配慮がなされておりました。辛い体験はされましたけれども，そういう点では，そこで暮らす女性達の表情が全く違っていたというのが，大変明るく穏やかにそこでお暮らしをしているというのが私達にとっても，とても印象的だったというところがございます。

また，避難所から仕事に通うという女性達もおりました。職場が被災をして解雇になったという人達もいるんですが，一方では何とか職場が被災を免れたということで，避難所から通う訳です。ただ，子どもを預けていた保育所が被災をして，閉鎖してしまっている，あるいは介護の必要なお年寄りを預けている介護施設も被災をして，再開をしていないと。そうなりますとお年寄りを連れて，あるいは子どもを連れて避難所に入って来るわけです。そうしますと世話をする人がいないので，休職扱いになるとか，最後は退職をするというようなことで，やはり経済的にも困難を抱えてしまうというような状況も見られたということがあります。子どもを連れて避難をするという方も結構たくさんいらっしゃいました。子どもさん達もこのような体験をしましたから，大変不安定になりまして，避難所の中を走り回ったり，あるいは夜泣きをしたりということが日常的にある訳です。あるいは障害を持ったお子さんを連れて避難をしていくとですね，周りの方に迷惑をかけるのでということで，自宅が1階部分はもう浸水をして使えないけれども，何とか2階部分は残っているのでということで自宅に戻られる方，あるいは車の中で時間を過ごす方というような形で避難所から出ていく女性たちもおりました。こういう方たちは，避難所から出ますと物資が手に入りません。ですからどうしてもそれで困りますので，避難所に行列をして物資を手に入れようとする訳ですが，またそれも余りいい顔はされませんので，幾つもの避難所を回って，少しずつ物資を集めていたというような，そういった役割を担っているのもまた女性達であるということなんですね。そういう意味では何と言いましょうか，やはり男女共同参画の課題というものが，今回の災害時に大変顕著に現われたということを，私たちは痛切に感じることが多かったと思います。

確かにこの長期間に及ぶ避難所生活ですので，こうした我慢ですとか諦めですとか，そういうことを続けている生活というのは，女性達にとっては大変過酷だったと思います。数か月に及ぶ避難所生活が終わって仮設住宅に移るわけですけれども。私達はそういった仮設住宅に移った女性達を対象に，気持ちの回復に向けたサロンであるとか，あるいは自立に向けた支援活動などを行ってまいりました。そういう中でも女性達がなかなか気持ちを取り戻せない，というような状況も数多く見てまいりまして，やはりその我慢や諦めというのが当たり前の生活になってしまったということに，大変私達も辛い思いもしましたし，これを何とかやはり回復をして欲しいというようなことで，力を尽くした時間がしばらくございました。

また，私達にとって，いわゆる仮設住宅で暮らしている被災の大きかった方達だけが被災者ではないと思っております。被災地に暮らして３月 11 日を経験した方達というのは，やはり皆さん被災者だと思うんですね。そういう意味では，先ほどの岩切もそうでしたけれども，公共施設をお借りしまして，そこでその地域の女性たちを対象にしたサロン活動も行ってまいりました。例えば，子育て中の方達を対象にしたサロン，あるいは障害児を抱えて３月 11 日をようやく乗り切った母親達を対象にしたサロンであるとか，また，いわゆる支援をした側の女性達ですね，自治体の職員もそうですし，ＮＰＯのスタッフなども大変疲弊をしておりますので，そういう方達を対象にして語り合いをするサロンということですね。これは皆さんにお話を聞いてまいりますと，やはり必要だなということをとても強く感じるところがあります。

それから，現在は震災と女性に関する調査を，昨年の９月，10 月になりますけれども，宮城県内の女性達を対象に行いました。少々時間がかかっておりまして，今は集計結果をまとめて分析をしているところで，本日は一部ご紹介をするように資料を持って参りましたが，1,500 人の女性たちに協力をいただきました。この多くがやはり仙台市内の女性達になっております。また，３月から５月にわたって約 40 人の女性の方達に聞き取り調査も行っています。シングルマザーの方であったり，セクシャルマイノリティの方，あるいは看護師さん，保健師さん，学校の教員さんですね。そういった方達に３月 11 日以降の体験について，お話を伺うという取り組みをしているところでして，全てはこの９月の末に報告書ができ上がりますので，でき上がりましたら皆さんにもお渡ししてご覧いただきたいと思っております。

本日お渡ししております資料の中で，アンケート調査の結果について一部ですけれども，ちょっとご紹介をしたいと思います。こんなにも大変だったのかということをお知らせする結果になってしまっておりまして，先ほどの岩切の女性たちの話を聞いて，ホッとしているところもあるんですけれども。これもまた現実ですので，お示ししたいと思います。まずは，避難所生活を経験して感じたことというのが３ページになります。これは，昨年の９月と 10 月の調査の結果ですが，自由記載のものを内容別に分類してグラフ化しておりまして，まず設備の面がやはり一番多かったと思いますね。プライベートな空間がなかったということ，それからトイレの問題ですね。トイレは大変で，水道が止まっておりますので，やはり大変不衛生であるということでの悩みが大変たくさん記述をされておりましたし，また「寒い，狭い」という，そういった記述も大変多く記載をされておりました。

それから運営面についても，女性のリーダーがいたら助かったということ。やはり，ほとんど多くが男性のリーダーであった，ということだと思いますね。

それから物資についても，私達も支援に入りながら実感をいたしましたが，津波被害というのは全てを失っている訳です。宅地被害の方達もたくさんいらしたわけですけれども。やはり津波被害というのは全て本当に，スプーンからお箸の果てまで流さ

れてしまっているということですので，そういう意味では私達も支援をしながら，必要な物を常に念頭に置きながら，持ってまいりました。その物資についても，多くの方達が大変困難を抱えたということがあったと思います。また，女性の場合は特に赤ちゃんを連れて，あるいは介護の必要な方達を連れて避難所に入ります。そういう意味では大変気遣いが多く，避難所が長ければ長いほど，そういった女性達の負担が大きかったということがあったかと思います。

それから４ページになりまして，次は震災を経験して抱えた困難ということについて，その家族とそれから仕事と健康と地域という４つのテーマについて，抱えた困難について自由記載をしてもらっております。本日は，家族と仕事の部分をお持ちしております。

家族については，やはりストレスと健康というところが一番多く記述がございました。この震災に伴って震災同居，それから家族離散ですね。こういった記述は大変に多くあります。震災同居というのはお分かりのように，震災に伴って自宅は無事だったけれども，親であったり，兄弟であったり，親戚が被災をして避難をしてくる訳ですね。そのケアをするのはやはり女性達ということになる訳です。ですから大変多くの家族の世話をしなければいけなくなるということで，体調を崩してしまったというような記述もまたございます。

それから自分が自ら被災をしてしまって，親戚のところに身を寄せるといった，そういった時の気遣いも大変に大きく，むしろ避難所にいた方が気が楽だったというような，そういった記述もございましたですね。

また，いわゆる家族離散ということで，家族数が多い場合には仮設住宅では足りないので，アパートを借りるとか，あるいは仮設住宅がいわゆる職場から離れているので，職場の近くにまた新たにアパートを借りるというようなことで，家族がばらばらで暮らしているということが多いわけですね。そうしますと経済的な負担も大きくなります。二重三重に生活費がかかるというようなことで，やはり大変難しい，困ったというような声も聞かれておりました。

また，家族の持病が悪化をして介護が必要になった，あるいは認知症が進んで１人で家に置いておけなくなったなど，そういうことも出てきております。また，子どもにもいろいろな症状が出てきておりまして，いわゆる恐怖で親から離れたがらなくなった，それから不登校になっているなど，やはり家族に伴う様々な困難というものも，私達の想像を超える以上にたくさん出されていたということが分かりました。

それから仕事についてです。５ページになりますが，仕事についての困難というところは，これは仕事量の増大による負担というのがトップになっております。これはいわゆる自治体の職員ですと，役所に寝泊りし，避難所に詰めて，とにかく支援活動に当たったわけですから，そういった意味では自分も被災者でありながら家族の安否も確認できないままに仕事に専念せざるを得なかった，という状況も反映しているの

だろうと思います。また，民間企業であっても，この被災を機にやはり顧客が少なくなったということで人員整理をする，そうしますと残ったスタッフの負担が大変大きくなるというようなことで，大変残業が増えていったことなども記述が多かったと思います。震災に伴って，失業，退職，転職というのはもちろん男性にもあったでしょうけれども，女性達にも数多くそういった状況が見られたと思います。こうした震災時というのは，どうしても仕事をしながらでも，やはり家族のケアということについて手が抜けなくなっていく訳です。ますます子どもが自分から離れない，あるいは介護の必要な親を親戚に預けっぱなしであるとか，どうしても女性達が家族と仕事の板挟みになっているというような状況がこの記述の中でも数多く出てきているかと思います。職場に子どもを連れて行ってしまったという記述もございますし，また，最後は家族を守るのは自分しかいないと思い退職をするというような，そういう選択をしている女性達もいたということが明らかになっております。

しかし，そのような中で，先ほどの岩切の女性達のように，やはり支援活動も多くの女性達が行っております。地域の中での安否の確認であるとか，生活物資をお互い助け合うといった活動をしておりまして，女性はいわゆる弱者ではないということを申し上げたいのです。そういった意味では，女性達もしっかり現実に向き合いながら，できることに大変取り組んでいたという状況も，別の設問がございますので，そちらでも明らかになっております。

6ページにありますように，やはり復興に向けて女性達も声を上げて，そして自分達も主体的に関わっていかなければいけないということが，この調査でお分かりいただけると思います。ここで復興計画に女性の視点を反映するために盛り込むべき内容を質問しておりますが，この中でやはり障害のある人，あるいは妊産婦，病人，高齢者，子どもなどのニーズを踏まえたきめ細やかなサポート体制を整備するということがトップになっております。いわゆる自分達が抱えた負担を，やはり社会的課題として解決して欲しいということにつながっていくんだろうと思います。また，女性の視点に配慮した避難所運営マニュアルをつくる，これはまさに実体験に基づいた回答だと思います。それから女性の地域防災リーダーや災害復興アドバイザーを育成し，地域に住む人々の支援体制を，実効性のあるものにすると。これも，やはり女性達がリーダーとして，地域の復興の担い手となっていかなければいけないということを認識をしてくれたのだと，改めて感じるところでもあります。

そういう中で，私達が今後に向けてということを考えた時に，ぜひこの東日本大震災を男女共同参画の視点で検証し，総括をしていただきたいと思います。私達もこの調査をするなどしてやっておりますけれども，ぜひ行政も行政の目線でこの検証を行っていただきたい。と言いますのも，やはり全国で今，首都直下であるとか，東南海地震であるとか，そういった危機感が高まっておりまして，全国のいわゆる男女共同参画を担当している部署が，とても積極的に防災と男女共同参画に取り組んでおり，

見える形で全国に広がっているというところがございます。ぜひ，そういった意味でも，ここ被災地から男女共同参画の視点で今回の震災を検証し，その結果を全国に発信していくということが大変重要ではないかと思っているところです。10 月には日本女性会議が開催されます。その場においてもぜひ，いわゆる総括した，また検証した結果というのを，全国の参加者の方々にお伝えしたいとは思っておりますが，ぜひとも仙台市としても取り組んでいただきたいと思います。

また，仙台市の復興計画の中にも男女共同参画の視点で復興を考えなければいけないということは盛り込まれております。それから，昨年末に国の防災計画も男女共同参画の視点で見直しがされております。今私が席を置いております中央防災会議でも近々報告がまとめられますが，その中にも男女共同参画が大変重要な視点である，ということが盛り込まれることになっております。そういう意味では環境ができているんだと思うんですね。やはり，さまざまな場で，この男女共同参画と防災というものが重要であるということが認められていると言いましょうか，そういう中で被災地である仙台市が何をすればいいのかということですね。それが大変重要ではないかと思っております。

それから，防災災害復興は今まで申し上げたとおり男性の分野というような形で，どうしても意思決定の場には多くが男性で占められております。これは防災や地震津波の研究者というのは，ほとんど男性なんです。私達も女性の研究者を探すのが大変なくらい，ということがあります。ただ，意思決定の場は研究者だけでは成り立たない訳でして，やはり生活者の視点であるとか，女性の視点を持った，いわゆる女性達がしっかりと発言できる，そういった場に参画をしていくことが大変重要であると思います。これはもちろん，地域レベルであっても，市町村の自治体レベルであっても，もちろん国レベルでもそうだと思いますし，それから防災を担当する行政の職員の中にも女性の数は大変に少ないです。ですから，そういう意味では行政の防災担当の職員の中にも女性の数を増やしていかなければいけない，ということも大きな課題だろうと思っております。

そして最後に，この地域に男女共同参画をどう広げていったらいいかということは，これまでも長い課題でした。でも，これは私はチャンスだと思うんです。言葉は悪いかもしれませんが，この防災を切り口にして，男女共同参画を進めていく，これは地域も受け入れます。地域は今，大変な課題を抱えているわけですので，そういう意味では先ほどの岩切の女性たちのような方達がもっと育って，そして各地域で活躍をしてもらいたいと思っているところです。やはり，日常の中に男女共同参画が実現されておりませんと，災害が起きたからといって男女共同参画を幾ら私どもが声を上げて言っても，それは難しいということを今回も大変実感したところです。地域の中には自主防災組織であるとか，婦人防火クラブであるとか，既存の組織があります。そこが新しい展開をできないものかという，これは新しい組織をつくるのは簡単ですけれ

ども，やはり既存の組織が何か可能性がないだろうかというところを私は諦めきれずにおりました。いわゆる地域防災を考える組織を立ち上げるとしたら，私は避難所の運営なども含めた形で，その地域防災を考える組織ですね，そこにはもちろん女性も入っていかなければなりませんが，若者であるとか，障害を持った方であるとか，お年寄りであるとか，そういう方達もしっかりと入って構成された組織ができ上がって，地域防災をみんなで考えるという方向性ができないものだろうかと思っています。

そして，やはり課題は働き盛りの男性です。やはり確かに男性が多くの防災を担ってくださってはいるんですが，先ほどもありましたように，高齢の男性が多い訳です。働き盛りの男性のワークライフバランスをどう実現していくかということにもなるかと思いますが，そうした男性達の参加ということも進めていかなければいけないだろうと思います。

地域防災リーダーを養成するという取り組みが仙台では始まると思いますが，この地域防災リーダーを養成するプログラムの検討委員会に，私も席を置かせていただいておりました。震災前でしたので，震災と同時にストップをしておりましたけれども，やはりこの育成は大変重要だと思います。この中に女性枠をつくるとか，かなり意識的に女性をそこで育成しませんと，また以前のように男性達で占められる防災リーダーということになりかねません。そこのところを何とか地域で女性達が防災に関して，リーダーとなるような環境づくり，仕組みづくりをぜひ皆さんにお願いできればというふうに思っているところです。

１つの取り組みではありますが，私どもの団体でこの８月，すぐ１週間後ぐらいですが，避難所ワークショップというものを宮城野区の出花体育館というところでやります。いわゆる避難所で，自分達の避難所づくりです。地域の方達がみんなで，その体育館をどのように避難所につくっていこうかというような取り組みをするわけです。男女共同参画という言葉を使いません。あえてそういう言葉は必要ないと思っておりまして，避難所をつくる中で，そこで困難を抱える人達にはどのような人達がいるのか，女性だけではなく，赤ちゃんを抱えた妊婦さんであったり，お年寄りであったり，障害をもった方たちがこの避難所でどう過ごしたらいいのか，ということをみんなで考えるワークショップです。それを今回初めてになりますが，８月にやってみようと思っているところです。

私どもは，避難所については快適にする必要はないと思っています。けれども，やはり人権が尊重される空間にはしていかなければいけないとは思っておりまして，そういう考えの下に，このワークショップを行いたいと思います。またどのような結果が出るかわかりませんが，これがもし上手くいけば，もっと多くの地域で広がっていけば，もっと避難所ワークショップを通しながら，地域の防災を考えるという，やはり人ごとではなく，自分たちで地域を守るという意識を育てる１つの手法としても効果的ではないかと考えているところです。以上です。

○下夷会長

ありがとうございました。では貴重な時間ですので，どうぞご自由にご質問等ありましたらお願いします。

では，最初に１つだけ。避難所の問題を最初にご指摘くださって，また最後，避難所のワークショップのところで人権の問題をお触れになったので，お伺いします。今回の震災の避難所の問題で，物理的な問題は幾つか出ているのですが，セクハラの問題がとても気になっています。それは被災された女性もそうですし，あと支援に当たられた職員の方だったり，ボランティアで全国から来てくださった方達だったり，そういったセクハラの問題はなかなか表に出ません。宗片さんが避難所を回られて，何かお気づきになった点やそういう問題は無かったのか，いかがでしょうか。

○宗片氏

私どもが入った中では，特別目立つような，そういう相談事というのはありませんでした。と言いますのが，女性達は大変に我慢をしている環境の中ですので，そしてとても気を使っております。せんだい男女共同参画財団で相談窓口をしておりますので，そのカードを渡すとか，そういうことはできるんです。この窓口に電話をしてみて欲しいというような，そういうことはいたしますが，直接私どもに相談はありませんでした。ただ，そういうことが起こり得る環境では，十分にありました。それはとても私どもとしても心配でした。

○下夷会長

ありがとうございます。

○佐藤（慎）副会長

いろいろな貴重なお話，どうもありがとうございます。私自身も建築の立場，都市計画の立場から非常に意識として同じようなところがあります。私自身は子ども環境という視点から，先ほどご紹介のあった避難所ワークショップというのを10年ぐらい前に建築学会のほうでやったことがありました。そういった意味からすると，それがもう現実問題として，本当の意味でリアルな地域で展開するべき段階にもう来たんだというのが，改めて宗片さんから教えていただいたような感じだと思います。

そうした時に，この避難所ワークショップのターゲットというのは，どの辺に定めているのかを教えていただければと。

○宗片氏

これは広く広報はしておりませんので，地域に回覧をしていただいて，地域の方達が参加できるような，そういう流れにしていきたいということで，広く他の地域にも声をかけるということはしておりません。だから，宮城野区の中で出花体育館のある出花町内会には回覧をしていただいたんですが，ちょっと余り集まりがよくなかったものですから，先ほどの岩切地区にもお声をかけて，いわゆる種をまいて，そこから私達が行かなくても自分たちでできるようなスタイルにしていきたいと思っています。

今回は夏休みの最中ですので，子ども達の申し込みもあります。ですから子ども達も一緒にこの避難所づくりをしていこうという準備を進めております。

○下夷会長

この地域防災を進めていくうえでの考え方として，女性リーダーをつくる，育成するというのが１つ。ただ，リーダーだけつくっても，そのリーダーがきちんとその地域の中で男性と一緒に対等に活動できないと意味がない，宝の持ち腐れになってしまうと思っていて，そうすると避難所ワークショップみたいな形で実際に一緒に活動する場をつくるということが大事なんだということを本日学びました。やはり，その２本立てで進めるのかと思うのですが，どうなのでしょうか。

○宗片氏

そうですね，私達もワークショップをするに当たっては，そのプログラムの中にはやはり女性達にもしっかり意識をしてもらうとか，女性達だけではなく参加してくる男性たちにも女性の視点が必要なんだということ，女性の視点と改めて申し上げませんが，やはり女性達にとって更衣室の問題であるとか，授乳の問題であるとか，トイレであるとか，様々な課題があるんだということを伝えながら，みんなの避難所をつくるというのは一体どういうことなのか，ということを改めて皆さんと一緒に考えたいと思っております。

○下夷会長

ありがとうございました。他には，よろしいでしょうか。

それでは宗片さん，本当に貴重なお話をありがとうございました。多岐にわたるお話でしたけれども，いずれも大変貴重なお話だったと思っております。いただいたご体験やご意見を基に，私達も地域防災について，女性の視点をどのように入れるかということを考えていきたいと思います。また今後とも，どうぞよろしくおねがいいたします。

○宗片氏

どうもありがとうございました。よろしくお願いいたします。

（宗片氏退出）

○下夷会長

それでは，次にその他の事例ということで，事務局からご紹介をお願いします。

○小野男女共同参画課長

まず参考資料１について，簡単にご紹介させていただきます。青森県での取り組みになりまして，東日本大震災におきまして，男女共同参画の視点からの様々な課題が顕著になったことを踏まえまして，青森県が地域における男女共同参画の視点を踏まえた防災体制づくりのためのモデル事業を実施するといったものでございます。

事業の概要でございますけれども，青森市とおいらせ町，おいらせ町というのは震災で被災した町なんですけれども，そこの２つの地区をモデル地区にいたしまして，

町内会長ですとか，防災士，ＰＴＡ役員，子育て中の女性などが実行委員となりまして，安心できる避難所づくりをテーマにワークショップを開催し，男女共同参画の視点を踏まえた避難所のあり方についてまとめまして，県内で地域防災についての啓発などを行なう取り組みとなっております。

続きまして参考資料２でございますけれども，こちらは仙台市の協働事業提案制度になりまして，市民協働推進部長からご説明いたします。

○市民協働推進部長

男女共同参画課は市民協働推進部の中にあるのですが，同じ部内にございます市民協働推進課の方で所管している事業でございます。これまで，いろいろなＮＰＯですとか地域団体の皆さんの活動に対して助成をする事業はたくさんございました。今回の事業は，地域団体やＮＰＯの皆さんから，行政と協働して実施する事業を提案していただいて，それを一緒に進めていこうという事業でございます。

お手元の資料は，先日プレゼンテーションを実施した際のものになります。実際には，公募で９団体ほど名乗りを上げていただいたのですが，相手先となる行政の担当課と一緒に事業ができそうなところというところで，話が整いつつあったこの３団体からプレゼンテーションをしていただきました。それを公開で皆さんで聞いて，ここの一番上にある「市民協働による地域防災推進実行委員会」というところから提案いただいた，地域に根差した仙台版の体験型避難所運営ゲームをつくりましょうといる取り組みが，採択されました。

提案してくれた団体は東中田という地区にございまして，その地区にある児童館を指定管理しているＮＰＯの方が中心となっているところなんですけれども，そのＮＰＯの代表の方は女性の方です。地域の学校ですとか，町内会，社会福祉協議会，地域包括，消防，それから交番，そういったところにお声をかけていただいておりまして，もちろん先日の審議会でお話させていただいた消防局の減災推進課・防災企画課，そういったところも関わる形で実施することになっております。

避難所運営に際しては，いざ避難所が立ち上がったところから始まるのではなくて，それ以前から地域の中でどれだけ関わりがあって，いざという時のことについて話し合いが持たれているかということも大事だろうということで，実際に実は静岡の方で開発された避難所運営ゲーム，頭文字を取ってＨＵＧ（ハグ）という，よく使われるゲームがあるんですけれども，それの仙台版になります。しかも，避難所が立ち上がってからだけではなくて，それ以前から地域の関わりをいろいろと考えていきましょうというゲームをつくるということを目的にして，この事業を推進するということになっております。

始まったばかりなんですけれども，地域の中からそうやって声が出てきて，しかもいろいろなところとつながりながら，実際に自分達の地域に根差したものをつくっていこうという話になっております。東中田は太白区にあるのですが，実は太白区は津

波と関係ないだろうと皆さん思われるかもしれません。しかし，つい閖上に近いところですので，つい寸前まで本当に津波が来た地域であり，津波によって避難して来た方がたくさんいらっしゃったところでもあります。この時，先ほどの岩切の方達もコミュニティーセンターが避難所になったというお話をなさっていましたけれども，東中田は児童館が避難所になったというところでもありました。そういった意味からも，子どもを守る，家族を守る，地域を守るということで，ものすごい責任のある立場にいらっしゃる女性達が中心になって，高齢者の多い町内会とも連携しながら，この地域の防災を考えていくという試みになっております。折に触れてご報告できたらと思っております。

○下夷会長

ありがとうございました。それでは，今回の２つのご報告と，事務局から仙台と青森の事例をご紹介いただきました。今後の地域防災を効果的に推進するために必要な男女共同参画の視点について，私達が提言をつくるにあたって，今回と前回も含めて結構なので，皆さんの自由なご意見をできるだけ多く出していただければと思います。お１人ずつでも構いませんので，お気づきの点やお感じになった点，できるだけ言葉に残していただいて，それを提言に盛り込めるようにしたいと思います。どなたからでも構いませんが，いかがでしょうか。

では，お１人ずつ回していこうかと思います。原田委員，いかがでしょうか。

○原田委員

本日は，特にございません。

○高橋委員

非常に考えさせられるお話をお聞かせいただきました。先ほど岩切の方のお話で，お子さん抱えていらっしゃる方ですと，なかなか活動できなくて，これで良かったのかという話も聞かれたっていうことがありました。逆に，そういう状況に置かれていたことで，そうでなかった場合には多分気づかなかったことも，たくさん気がつくことができるということもあったのかなと思いました。あともう１つ，今日の話で考えたことが，ご家族のいらっしゃらない方，女性でも男性でも，場合によっては独身だったり，結婚されていてもいいんですけれども，お子さんとか介護の必要な親御さんがいらっしゃらない方というのは，どのような形でこういった活動に加わっていくのがいいのかな，ということを考えました。

○高野委員

毎回毎回，聞けば聞くほど難しいというか，いわゆる私等は民間企業なものですから，前回にも申し上げましたけれども自分達を守るという視点で見るので，どうしても全体を見渡すということをほとんどしません。聞けば聞くほど非常に難しい問題だというのが率直な意見です。

もう１つは，働き盛りの男性の参加ということで，いわゆる町内会の活動でもＰＴ

Aでもそうなんですが，本当に働き盛りの人がどれだけ出ているのかというところにいつも疑問があって，こういうところでいわゆる風潮と言いますか，世の中のコンセンサスといったものを，どうやって形成したらいいのかというのが本当のところです。社内での啓蒙も含めて，私もちょっといい機会だなと思って考えてみます。

○佐藤（理）委員

私，実はこのイコールネット仙台の理事なものですから，ちょっと話が重なってしまうと思うんですけれども，この避難所ワークショップというのが非常に有効だと思うんですね。これは具体的に自分達の避難所をデザインするということはもちろんなんですけれども，まずはいろいろな人達が集まって気づきを得るところからスタートするという意味では，とてもいいと思うんです。被災した時に子ども達はどんな食べ物を食べるんだろうかとか，子ども達が必要な，子育て中の人達が必要なものはどんなものだろうかとか，介護に必要なグッズというのはどんなものだろうかということを，それぞれ生活者の視点で想像できる人はいいんですけれども，やはり想像できない人もいます。でも，男性も女性もみんなが，そういったことを想像できるようになるべきだと思うんですね。そのためには，まずいろいろな人が集まって，障害のある人はこのようなことが大変なんだ，といったことを互いに話し合い，避難所をデザインしていく中で気づいていくということがすごく重要だと思うんですね。

こういうワークショップをいろんな地域に広げていけばいいと思います。最初は小さい芽であっても，段々とそれが広がっていくことで，多様な視点をみんなで共有できるようになるのではないでしょうか。実際に避難所を運営しなければならなくなった時に，実は私達こういうふうなことをして欲しいんですと，なかなか言えない人達はいっぱいいたと思うんです。でも，そうやって事前にみんなでコンセンサスを得ていれば，「ああ，あの時言っていたあの要望ね」ということで，余りハードルが高くなく，みんなが要望を言えるような関係性がつくれるということがあると思います。とりわけ女性の視点ということではなく，多様な視点という考え方で，多様な地域の人たちが視点を交流する場が必要なのかなと思っています。

○長田委員

私は緑上さんと同じ岩切地区で家も非常に近いのですが，私が一番感じたのは，震災時に男性が職場に早く復帰するためにも，ああいう女性の方々が地元でしっかりした組織をつくっていただくというのは必要不可欠だと思うんですね。ちなみに，私は母子生活支援施設の方に約 10 日ぐらい泊まりこみました。そのうち家に帰ったのは，自分の着替えを取りにと，震災が起きてすぐ状況を見に行ったということの 2 回ぐらいだったんですかね。

あと，もしかするとやっているのかもしれませんけれども，例えば老人クラブとか町内等に助成金などを出しているのかなと思うんですけれども，そういった兼ね合いで，例えば女性参画のモデルなどを公の方で示していくとか，啓蒙していくというこ

とを，ある程度強い条件として入れていくことも効果的なのかと。特に，岩切のような場合には，そういうのも少しあると助かるのかなということを感じました。

また，地震などの時には避難が長期にわたるという特徴があると皆さんおっしゃっていますが，そういう場合というのは，例えば避難所なんかもある程度落ち着いてきた時に別棟みたいなものを設けて，いわゆる女性専用の建物みたいな小さなスペースなんかを効率的に導入していくことは可能なのではないかと思います。

最後に，一番心配なのが社会的な弱者，独居老人ですとか，要介護者だけの家族というのが，間違いなく，我々の地域，岩切にもいらっしゃるんですね。そういった方々を拾い上げる情報のネットワークがどこにあるのかということを今回知ったというか，あまりないと言うんですか，あったとしても地域包括とかで他の地域からケアマネージャーさんとかが来ていると，震災が起きてすぐにはその情報はどこからも出てこないんです。だからと言って，町内会でそれが分かっているのかというと，新興住宅地と古い住宅地がちょっと入り交じっていますので，そういうのも情報的にどこからも出てこない。ということは，もしかすると一番援助援護が必要な人達にタイムリーに早い時期に避難物資などが渡らなくなるような恐れがあるんじゃないのかと。ですから，その辺の情報網というか，独居老人や要介護者の情報というものを，いろいろな部分で共有していくということが大切なのではないかなと非常に思った次第です。

○草委員

今，私は町内会を運営していますが，この震災を踏まえて１年５か月になるということで，次のステップとして今長田委員さんがおっしゃったように，民生委員さん，あるいは障害者の方，あるいは消防分団の方，そしてＰＴＡであるとか，あと学校関係者とか，そういった方々のリーダーを横のつながりで組織をつくって，意見交換して，何が必要で何が必要でないか，できることは何なのか，できないことは何なのかといったことを，お互いにお話をしましょうということで動いているところです。

壁にぶつかったのが，障害者の代表の方とお会いしたかったんですけれども，障害者の方というのは親の会はないと言われたんです。学校そのものにはＰＴＡの間ではあるにはあるけれども，それは任意であるので全員が全員入っている訳ではない。仙台市や宮城県の組織には登録はされているが，地域でお互いが分かるような組織はないという答えが出ました。それが，本日の午前中の答えだったので，では次のステップということで，今ちょっと頭を巡らしているところです。健常者も弱者も含めて，横のつながりでやっていきたいなという形で進めているところでございます。

○佐藤（美）委員

今日，情報提供いただいた方々なんですけれども，震災の前に宣言をつくっていたり，あといろんな調査をなさっていたりで，前もってそういう備えをしていたっていうのは大変立派だなというか，頭が下がる思いでした。ただ，岩切の皆さんおっしゃっていたんですけれども，そういう方々なのに，上の方々に意見を聞いてもらえない

という趣旨のご発言がありましたけれども。大変，意外に思いました。残念に思いました。

働き盛りの男性という言葉があったんですけれども，男性だけではなくて女性も働き盛りの人は職場と住まいが離れていることもありますので，震災直後の安否確認とか，そういうことはできないんですね。私も自宅に戻るまでに３時間半くらいかかりまして，私のようなものは震災直後の安否確認などは全く役に立たない。だから，日頃家にいらっしゃる方にそういうことは頼らざるを得ないのかなと思っています。ですから，やはり震災直後の役割分担ですとか，そういうことを日頃から備えて，皆さんで話し合っていくことが大事かなと感じました。

○橋本委員

岩切の皆さんでありますけれども，今回女性の方々が集まっての１つの宣言をつくるということで，自分たちが率先して横のつながりを持って，何をどうしていきたいのかということを皆さんそれぞれお１人お１人が考えて行動した，そういったきっかけづくりというのは本当に大切なんだと思いました。これは女性に限ったことではなくて，男性でももちろん当てはまることでありますけれども，そういったきっかけは，団地なら団地，旧来からの地域なら旧来の地域でまた状況が違うわけですから，そういったものをいろいろな参考事例を１つ１つ研究してみながら，地域に合った取り組みをまず検証してみるのも１つなのかなと思いました。と同時に，先ほどおっしゃいましたけど，やっぱり地域の方々との日頃からのお付き合いはやはり大切だと，そして男性の理解だけではなくて，自分の親の，同性の母親だったり，私は意外だとびっくりしたんですけれども，なるほどなと思いました。同性であっても２世代，３世代ぐらい上の方々だとまた考え方が違ってくるので，そういった考え方を持っている方々ともやっぱり話をしていく必要があり，女性だから同じ考えだということではなく，世代によって大分違ってくるんだなという感じがしました。

また，宗片さんのお話を伺った時に，男性のリーダーしかいない，女性のリーダーが少ない，こういったことによる弊害は確かにあると思います。こういった時こそ，女性の視点からの検証が本当に必要だなと思っておりましたし，それが震災前の2008年にもう具体的な提言まで出されていたということも，すごいことだなと思いました。ただ，先ほど別の委員さんおっしゃいましたけれども，女性の視点だけではなくて，障害者からの視点，子どもからの視点，高齢者からの視点など多様な視点を１つ１つ出しながら，いろいろないいものをつくっていくということが大切だということもありますし，改めて女性が少ないのはなぜなのか，男性はどういう視点を持って行動しなければならないのか，考えなければならないのか，そういったことも考えていく必要があるなと感じました。

○佐藤（慎）副会長

皆さん，どうもありがとうございます。私はやはりこういうなお話の中に，復興に

向けての減災というのもやはり大切かなと，改めて思いました。過酷な状況の中で，その時にいかに高齢者の方が安全な住まいにいるようにするかということで，例えば仙台市の中で津波による浸水が２メーター以下のところは集団移転にはならなかったんですけれども，そこの地区に行くと，やはり亡くなった人の多くは65歳以上の高齢者だったりするので，そういった方をどのようにケアするかなど，そういったいろいろな視点で考えると，減災という視点も日常のこういった防災意識づくりとともに並行してやっていかなければいけないだろうという視点を持つことができました。

○下夷会長

では，私も一言だけ。津波や地震でなくても，竜巻だったり豪雨だったり，災害は本当にもう私たちの身近に感じられるようになっているので，地域防災ということの重要性は，今みんなすごく認識していると思うんですね。宗片さんのお話がすごく印象的だったのは，女性が障害者や高齢者など，いろいろな方達の意見をケアしているから，その人たちのニーズが女性を通して見えてくるということが非常によく分かりました，そういうことを含めて，男女共同参画の視点が地域防災に必要だということを，改めて感じました。

地域防災だからと言って，地域のところだけで男女がフィフティ・フィフティになったら上手くいくかと言うとそうではないということも，また一方で感じました。岩切の事例もそうでしたけど，最初に木須区長さんが声をかけて，地域で活動していた女性の方がそれを受けて，ワークショップに宗片さんが参加されたという形で，地域で男女が共同参画できるためには，もっとその前に男女が，女性の活躍できる場がつくられていなければけならないということもまた実感したところです。

そうすると，地域防災を考えるヘッドの部分というか，行政や審議会といったところに女性の委員をきちんと入れていかなければならないということと，あと現場の部分でも前回地域防災アドバイザーでしたでしょうか，消防局の方が来てくださったのですが，あのようなアドバイザー，地域の現場の上のところにも女性が行っていなければならないし，そのためにはきっと消防士なども，女性消防士をもう少し増やさなければならないのだろうと思うし，さらにその地域レベルでの男女の共同参画が必要だなと思います。

地域防災を確実に男女共同参画の視点で進めていくためには，本当にもう少し幅広いところからも男女共同参画を進めていかなければいけないし，そして，その地域防災で男女共同参画が進んだら，それを梃子にして，また広い分野に男女共同参画の種がまかれるということもよく分かりました。今回の私達のテーマは，震災を受けての今年度の検討課題ですけれども，そういった大きな広がりの可能性を持つテーマですので，できるだけ皆さんの意見を反映させて，よい提言ができるように，またさらに皆さんのお力をお借りしたいなと思いました。以上です。

それでは，皆様からのご意見，本当にありがとうございました。本日の審議会と前

回の審議会でいただいたご意見を基に，次回以降の審議会で実際に地域防災を効果的に推進するために必要な男女共同参画の視点についてという提言を検討していくことになります。ここからがまた重要な場面になってまいります。それでは次回の審議会の進め方等について，事務局にご説明をお願いします。

○小野男女共同参画課長

本日はどうもありがとうございました。それで，あまりご意見をいただく時間も無かったので，あとででも結構ですので，意見を思いついたとか，こういった意見を言っておけば良かったということもあると思いますので，こちらから様式をメールか郵送等でお送りしたいと思います。お気づきの点がありましたら，ぜひご意見をいただければと思います。

それで，次回からの進め方になりますが，次回の審議会におきましては，提言の案についてをお示しさせていただきたいと思います。事務局で提言の案のたたき台をつくりお示ししまして，それで次回の審議会，９月か 10 月になると思いますけれども，そちらでさらにご議論いただきまして提言の案を作成し，最終的には 11 月の審議会で提言の決定という形にさせていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いします。

３　その他

○下夷会長

その他，何か委員の皆様からございますでしょうか。

では，事務局から何かございますか。

○高橋男女共同参画課主幹

本日は，ありがとうございました。それではまず１つ目，議事録の作成でございますけれども，事務局で原案を作成いたしまして，皆様にお送りいたしますので，内容のご確認をお願いしたいと思います。皆さんにご確認いただきましたら，今回の議事録署名人の方に署名をいただきまして公開というような運びになります。それから次回審議会につきましては，また皆様の日程を調整させていただきまして，改めてご案内したいと思いますので，よろしくお願いしたいと思います。

４　閉会

○下夷会長

どうもありがとうございました。これを持ちまして，本日の審議会は終了といたします。皆様，お暑い中，長時間熱心な議論をお続けくださいましてありがとうございました。

議事録署名委員の署名

仙台市男女共同参画推進審議会委員　原田俊男

仙台市男女共同参画推進審議会委員　佐藤理絵